教科指導における新学習指導要領への円滑な移行のための支援

－教育内容の主な改善事項を踏まえて－

教科教育室　沖田浩史　窪田賢治
曲渕　司　村上浩二
重松聖二　丸尾秀樹
村上圭司　山田智子
成平　功

【要　　約】

教科教育室では、「新学習指導要領への円滑な移行」の推進に取り組む愛媛県下の各学校を支援するため、「言語活動の充実を図る学習指導」「伝統や文化に関する教育の充実を図る学習指導」「知識・技能の確実な習得と思考力・判断力・表現力等の育成を図るための教材開発」について研究し、教科指導の在り方を探った。研究成果としての指導事例、開発教材は、今後、本教育センターの研修講座や出前講座などで広く普及に努めたい。

【キーワード】　教科指導　言語活動　伝統や文化に関する教育　思考力・判断力・表現力等の育成　教材開発

１　研究の目的

新学習指導要領は、平成21年度から小・中学校において移行措置による実施が始まっており、平成23年度からは小学校において、その後、中学校、高等学校においても、順次、全面実施されることになっている。「新学習指導要領への円滑な移行」は、昨年度に引き続き、今年度も愛媛県の教育重点施策の一つに位置付けられており、愛媛県下の各学校においては、来年度以降の全面実施に向けて、「新学習指導要領への円滑な移行」の推進に取り組んでいるところである。

そこで、本年度、教科教育室では「教科指導における新学習指導要領への円滑な移行のための支援」を題目として研究に取り組むこととした。教育内容の主な改善事項を踏まえ、「言語活動の充実を図る学習指導（国語科、社会・地理歴史・公民科、理科）」「伝統や文化に関する教育の充実を図る学習指導（音楽科、保健体育科）」「知識・技能の確実な習得と思考力・判断力・表現力等の育成を図るための教材開発（算数・数学科、理科）」について研究し、各教科・科目の目標を達成するための指導の在り方を探った。

研究の成果については、愛媛県総合教育センターで実施される基礎研修や課題別研修、出前講座を通して、また、ホームページによる教育情報の提供などを通して、積極的に公開に努め、各学校や教職員の支援に取り組みたいと考えている。

２　研究の内容

⑴　言語活動の充実を図る学習指導

中央教育審議会答申（平成20年１月）では、教育内容に関する主な改善事項の第一に、言語活動の充実が挙げられた。各教科等における言語活動の充実は、今回の学習指導要領の改訂において、各教科等を貫く重要な改善の視点となっている。国語科、社会・地理歴史・公民科、理科では、各教科の学習指導において言語活動の充実を図り、児童・生徒の思考力・判断力・表現力等を育成するための授業改善の方策について研究することとした。

ア　国語科の取組

国語科では、毎年実施されている、全国学力・学習状況調査（小学校第６学年及び中学校第３学年対象）、愛媛県学力診断調査（小学校第５学年及び中学校第２学年対象）を活用し、効果的な言語活動を取り入れた授業について提案、実践した。授業実践では、特に、根拠を基に自分の考えを書き、書いたものを交流することにより、「書くこと」や「読むこと」の力を高めたいと考えた。

⑺　児童・生徒、指導者の意識調査

「言語活動の充実を意識した授業」「全国学力・学習状況調査、愛媛県学力診断調査の活用」について、県下の指導者を対象に意識調査を実施した。

調査対象：	愛媛県下の小学校178名、中学校68名、高等学校30名の国語の指導者
調査期間：	平成21～22年度

言語活動の充実を意識した授業を「現在、行っている」、また、児童・生徒が交流したり話し合ったりする機会を「意識して多く設定している」、と回答した小・中学校の指導者は、いずれも70％を超えており、言語活動の充実に対する意識は高い（図１、２）。

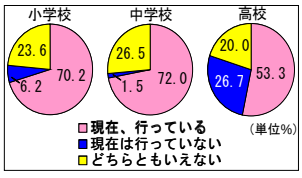

図１　言語活動の充実を意識した授業

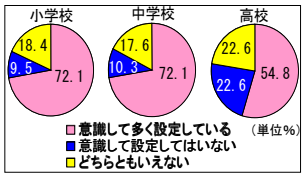

図２　交流したり話し合ったりする機会

全国学力・学習状況調査や愛媛県学力診断調査の結果を意識して授業をしているという先生方に対して、調査問題を活用したことがあると回答した先生方の割合は少ないという結果であった（表１）。

表１　全国学力・学習状況調査、愛媛県学力診断調査の活用状況（%）

	小学校	中学校	高校
全国学力・学習状況調査の結果を意識して授業をしたことがある。	46.4	66.1	7.1
全国学力・学習状況調査の問題を活用して授業をしたことがある。	5.2	8.9	0.0
愛媛県学力診断調査の結果を意識して授業をしたことがある。	38.1	44.6	0.0
愛媛県学力診断調査の問題を活用して授業をしたことがある。	3.1	3.6	0.0

以上の結果を踏まえ、全国学力・学習状況調査及び愛媛県学力診断調査を活用し、効果的な言語活動を取り入れた授業を、小・中・高等学校において実践した。

⑴　言語活動を取り入れた授業実践

ａ　小学校での実践（第６学年）

平成22年度第１回愛媛県学力診断調査の小学校の問題を活用して、「俳句の創作と交流」の授業を実践した。実際の問題は、「ほたる」を題とする俳句を作るという設定で、「（　　）いもうとがよぶほたるがり」の（　　）の中に自分の考える５音の言葉を書き、その理由を25字以内で書くというものである。これに準じて、４～５人のグループに分かれ、それぞれの児童が同じ季語を使って俳句を作り、グループの中で読み合い評価し合うという活動を実践した。図３は、読み合い評価し合う活動の中で使用したワークシートである。

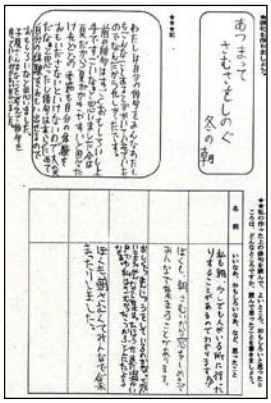

図３　交流で使用したワークシート

「夏の朝」をテーマに作った児童たちは、「夏の朝みんなが起きて明かり照る」「夏の朝起きたらパジャマがあせまみれ」など、それぞれの思いで俳句を創作していた。交流後の児童の感想には、「同じ夏の朝でも違う暑さの表し方があっておもしろかった」「自分の俳句に共感してもらってうれしかった」「もっと俳句を作ってみたい」などが挙げられており、交流活動を通して、俳句の創作や鑑賞に対する意欲の高まった児童が多く見られた。

ｂ　中学校での実践（第２学年）

中学校では、平成19年度全国学力・学習状況調査の小学校の問題（図４）を活用して、「読書感想文を書く」の授業を実践した。まず、問題文にある二人の感想文を読み、二人に共通する書き方のよさや工夫を自分の考えとしてまとめさせる。次に、自分の考えを書いたものを、グループの中で評価し合い、最後に、教師の指導を踏まえ、よい感想文の書き方をまとめさせた。生徒は、よい

全国学力・学習状況調査　小学校　国語Ｂ問題
３　中川さんの学級では、夏休みに読んで本の中で心に残ったものを感想文に書き、図書新聞にのせることにしました。先生が、感想文の書き方の勉強になるように二人の感想文をしょうかいしました。同じ本について書いた二人の感想文を読んで、あとの問いに答えましょう
〈青木さんが書いた感想文〉　省略
〈高橋さんが書いた感想文〉　省略

先生は、この二人の感想文はどちらも良い書き方だとみんなにしょうかいしました。二人に共通する良い書き方とは、どのようなことですか。二つ書きましょう。

図４　平成19年度の小学校調査問題の内容

感想文の書き方として「主人公などが言った印象に残る言葉を入れる」「自分の体験と比較し、感想、意見、決意などを述べる」などを挙げていた。図５は、グループで交流しているときの様子である。

図５　交流の様子

その後、夏休みの課題として、読書感想文を書かせた。上記の授業実践が、読書感想文を書くときに役立ったこととして、生徒は、「文章の順序を考えるときに参考になった」「読み手のことを意識するようになった」ということを挙げていた。読書感想文の指導の時間に、調査問題を活用し、生徒に交流させることで、生徒は感想文を書きやすくなるものと考える。

ｃ　高等学校での実践（第１学年）

高等学校では、平成21年度全国学力・学習状況調査の中学校の問題を活用して、「三つの詩を読み比べ、写真と組み合わせて紹介する」の授業を実践した。本実践では、調査問題で紹介された「樹」（まど・みちお）の詩のほか、「木」（田村隆一、高等学校国語総合の教材）と「大木」（原田直友、小学校第６学年の教材）を合わせて紹介し、三つの詩の中から好きな詩を一つ選ばせた。さらに、五つの木の写真の中から自分が選んだ写真と、詩を組み合わせて紹介させた。木の写真は調査問題の写真をそのまま活用した。図６は、木の写真の一例である。

図６　写真の例

小・中学校の実践と同様に、グループ内で読み合い評価し合う活動を通して、それぞれの読みを深めていった。生徒は、「詩と写真の組み合わせが同じでも、まとめ方が違っていた」「自分とは全く別の視点があることが分かった」「自分の視点も認めてくれてうれしかった」という意見があった。

⑵　まとめと今後の課題

授業改善のためには、調査問題を活用し、様々な言語活動を取り入れて交流させることが有効である。今後は、これらの実践をあらゆる場面で紹介し、児童生徒の思考力・判断力・表現力向上のための支援をしていきたい。